

論文名：歯列に対する自己評価および客観的評価と矯正歯科治療の動機づけとの関連性

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 佐藤 知弥子

【背景および目的】先行研究において、「歯並び」に不満があっても矯正歯科治療（以下、矯正治療）を希望しない場合が認められた。しかしながら、その理由については未だ明らかにされていない。そこで本調査では、総合大学新入生に対する口腔健康診断時に実施した、不正咬合に関する口腔内診査およびアンケート調査をもとに、審美的要素に対する満足度および矯正治療に対する認識度（＝自己評価）と Dental Aesthetic Index（以下、DAI）を構成する評価項目（＝客観的評価）との関連性を統計学的に検討し、矯正治療の動機づけとなる要因を明らかにすることを目的とした。

【資料および方法】2014 年度または 2015 年度に新潟大学新入生口腔健康診断を受診した 3,515 名のうち、対象年齢を 18 歳 0 か月から 21 歳 11 か月とし、矯正治療経験者、アンケート調査票に未記入欄がある者を除外した 2,557 名とした。そのうち本調査の解析対象は、アンケート調査にて自己の「歯並び」に対して不満足と回答した 1,134 名（男性 577 名、女性 557 名、平均年齢 18.45 歳）とした。

アンケート調査は口腔健康診断の待ち時間を利用して行った。アンケート調査における質問内容は、歯列や顔貌などの審美的要素に対する満足度、矯正治療に対する認識度到大別され、それぞれ 6 項目、9 項目の計 15 項目から成り、それぞれの項目について 4 つのうち 1 つを選択させた。口腔内診査においては、5 年以上の矯正歯科臨床経験を有する歯科医師らが DAI に基づき診査した。口腔健康診断で得た結果について後日集計し、DAI 値を算出した。

統計学的分析では、目的変数を矯正治療に対する希望の有無、説明変数を自己評価項目と客観的評価項目として、二変量解析と多変量解析を行い両者の関連性を検討した。本調査では、アンケート調査における 15 項目を自己評価項目、DAI 構成項目および DAI 値を客観的評価項目とした。二変量解析では、数量的データについてはカテゴリーが 3 つ以上の場合には分散分析を、2 つの場合には Welch の t 検定を行い、質的データでは、それぞれカイ二乗検定（尤度比検定）および Fisher の正確検定を行った。次に、二変量解析において有意差を認めた項目について男女別に多変量解析を行い、多変量ロジスティック回帰分析（変数増減法；閾値 P 値 0.2）を適用した。帰無仮説に対する棄却判定の有意水準はいずれも 5%未満とした。

【結果】矯正治療希望者の割合に男女差を認め、男性に対し女性の方が矯正治療を希望する傾向にあった。また、多変量解析において、男女に共通して矯正治療の希望の有無に対し統計的に有意であった自己評価項目は、「治療後の口元の変化に対する期待度、現在の下顎形態の満足度、就職活動への影響」の 3 項目、男性でのみ有意であった項目は「現在の口元の満足度」の 1 項目、女性でのみ有意であった項目は「抜歯への抵抗」と「治療費」

【別紙 2】

の 2 項目であった。一方、矯正治療の希望の有無に対し統計的に有意であった客観的評価項目は、男女ともに「DAI 値」のみであった。

【考察】矯正治療を希望する男女比については時代とともに多少の変動はあるものの、いずれの時期においても男性に対して女性の方が矯正治療を希望する傾向にあることが示唆された。矯正治療の動機づけに影響する要因は、自己評価項目では男女に共通して「治療後の口元の変化に対する期待度、現在の下顎形態の満足度、就職活動への影響」が影響していることが示唆された。また、男女で異なる項目も挙げられ、各項目の影響度に男女間で相違を認めた。すなわち、矯正治療の動機づけにおいて、特に男性では審美的要因の影響度が高く、女性では社会的・心理的要因の影響度が高い可能性が示された。一方、客観的評価項目では男女ともに DAI 値が矯正治療の動機づけに影響する要因として示され、DAI 値は矯正治療の動機づけに係る客観的指標として有用であることが示された。

【結論】総合大学新入生のうち「歯並び」に不満がある群を対象に、矯正治療の動機づけとなる要因について統計学的に検討した結果、男性に対し女性の方が矯正治療を希望する傾向にあった。矯正治療の動機づけに影響する要因は、自己評価項目では男女に共通した項目や男女で異なる項目が挙げられ、各項目の影響度に男女間で相違を認めた。客観的評価項目では男女ともに DAI 値が挙げられ、DAI 値は矯正治療の動機づけに係る客観的指標として有用であることが示唆された。